



リステラス星圏史略
古資料ファイル
8 - 6



『星海女王伝』
～ 銀河の星の海 ～

(旧原稿搜索中)

霧樹里守 is 土岐真扉

目次

【 移転 と 変態 の お知らせ 】.....	1
『 銀河の星の海 』～星女王物語～ （未完）	
○ 『 銀河の星の海...星女王物語 』○	5
序景*惑星ラーヴェにて.....	6
第一話* テラー・メーア...女学院.....	14
「第二話*星王の船」 （1）.....	17
（2）	20
（草稿&没原稿）	
（草稿&没原稿）	27
（ sect.1 ） （高校？）	28
「 FourLoves. 1. 金と銀。」.....	31
“銀河の星の海” 「ふたり・Part I」 （恒沙真谷人）	32
（遠い世界になにを探して）	40
（彼女はスタークイーンにまつわる記憶の全てを解きはなした。）	41
（...黄金と群青の海...）	42
（まんがのネーム！） w（^w^；）w （中学1年！）（^◇^；）.....	44
（キャラ設定）	
（キャラ設定）	49
（星王とステラ）	50
（ステラ） （少女時代）	51
「王女殿下」正装のステラ.....	52
“星出”当時のステラ・ラ・ヴィスタリア.....	53
（学生時代のステラ）	55
ステラの入学式？ と、てごめられシーン★ （中1～2）	56
（ステラ） （成人）	57
（スタークイーン）	58
（学生時代のスイリン）	59
スイリーン（シンシア） （学生時代）	60
「銀の恐怖」 シャイリーン・ライラ.....	61
“銀の恐怖” スイリーン.....	62

スイリーン。	63
☆ 銀髪3人娘 ☆	64
(スイリーンとリュシェイア) (見分け不可★)	65
(たぶん晩年? のスイリーン。)	66
(設定資料)	
(設定資料)	69
『銀河の星の海 ～星海女王伝～』	70
挟撃の間隙。(宇宙史逆走) 2015年9月19日	72
惑星《緑》が、後の《漆黒の星海女王》の出身地。(?)	75
(新資料) (講談社X文庫のための? 梗概)	76
(借景資料集)	
(借景資料集)	81
(借景 BGM 集)	82
エルとエイリスのいつもの痴話? 喧嘩w	83
処女戦士ジレル 暗黒神のくちづけ (ハヤカワ文庫SF) C・L・ムーア	85
奥付	
奥付	89

【 移転 と 変態 の お知らせ 】

☆
☆ 超～大幅に！ 加筆&改稿した2023年版、
☆
☆ こちらに移転しました。
☆
☆
☆ ♡『 偽 女王伝 』♡ (1)
☆
☆ ～少女王♡ ゆり♡ ロリ♡ 異伝 ～
☆
☆
☆ <https://novelpia.jp/novel/3750>
☆
☆

=====

(旧原稿搜索中)

=====

『銀河の星の海』～星女王物語～ （未完）

○『銀河の星の海...星女王物語』○

＼＼○『銀河の星の海...星女王物語』○＼＼

序景＊惑星ラーヴェにて。

＼＼○『銀河の星の海...星女王物語』○＼＼

序景＊惑星ラーヴェにて。

「ようこそテラー・メーアへ」

そのどっしりした老婦人は言ったものだ。両手を広げて。

「ですが今、当学院では編入者は募集していないのですよ。半期後の新規入学生選抜試験を受けていただかなくては」

大銀河を半周もしてラーヴェを探して来た者に対する、これがセリフだとしたらあんまりだ。この治安のひたすら悪い星の半期間といえは300日にあたる。その間の寝ぐらと身の安全をなんとしろと言うのだ。金だってそんなには無い。

それでも下宿と仕事先を紹介しようという親切は断ってステラは校門を追ん出た。

あれからそろそろ半年...
彼女は平然と生きている。

前身はうろんだが馴染みのもの相手には信用のおける商いをするラダー・バールの表の店で今日の食糧、タイス2斤にトルティサとチャイの真空詰め。それだけを買って彼女・ステラは近道をしようと裏通りに踏み込んだ。

ラーヴェの首都ロヴの町の交易商人横丁の裏道...と云えばまともな人間の足に向けるべき場所ではない。半ば廃墟と化した古代構造物のまにまに、たっぷりの濃い霧と少しば

かりの乞食と世捨て人と、掃いて捨ててもまだ余るばかりの強盗追いはぎの類……そういう場所である。

その、最も危険と云われている辺りスレスレをかすめるようにして、急ぐでもなく大胆に歩を進めている少女。長いゆたかな黒髪をかすかな風を受けて無雑作に背中へ流し、湿気の多いこの惑星の住人の常として羽織っている長マントの色は、目にも鮮やかな明るい灰緑の色である。

悪徳と因習との占めるこの古い都にて、彼女の颯爽とした歩きぶりは否応もなく人目を魅きつけて余りあるものだった。

「よう姐ちゃん」

角を曲がった所でヤクザな5人組がゾロリと湧いて出るのを見て、ステラは顔をしかめた。うち2人の顔には見覚えがあったのである。

ラダーの店だ。

舌打ちをして抱えていた包みを地面に降ろす。

「そうそう姐ちゃん。ついでにその腰のゼニ袋も外してもらおうじゃねェかい」

「命までもとは云わねェからよ」

あまり有り難い事態ではない。

どうせ普段からはこのチンピラどもともさして変わりのない生活水準なのだ。盗られて恐いものがあるわけでもなし、それよりは暴漢達はイキの良さそうなステラ自身が目当てで襲って来る。顔に傷でもつけたら元も子もないので武器も持っていない。…から、相手にしやすい。

たまたま今日は大金を持っていて、たまたまラダーの店で入れ違いになった2人の男に、財布の中味をのぞかれてしまったらしい… のが、不運になった。

「...命を買える程の大金でもないのは確かだけれど... これが無ければ“夢”が買えなくなってしまうのだよね」

片手で巾着のベルトがしっかり体につながってるのを確かめて、未だ少年のような体つきの、背ばかりスラリと高い少女が静かに身構える。

「“夢”だ？」

「そう。テラー・メーアに入学すること。」

短い言葉の裏にかすかににじみ出る気迫と、自負のようなものに、チンピラ達はわずかながら、たじろがされたようだ。

それとも、最下層街を一人でうろつきまわるような、いずれうさんくさい小娘の口から、単に大銀河最後の女性教育機関の名の出た事が、意外だっただけであろうか...

「怪我をしたくなければ、どきなさい。」

言い放った彼女の表情は、もはや先程までの気楽な下町娘のそれでは、有り得なかった。

腰を低く落として構えると少女は奇妙な仕草をした。両の腕でまるで舞をでも舞うかのような優雅な弧を描いたのである。

男...その時まで、すぐ近くの壁にもたれて、興味もなげに騒ぎを耳に入れていた影...は、その動作を視た瞬間にぎくりとして瞳を光らせた。それからやおら立ち上がり、さらに見守る。

最初の2人は容易に倒せた。相手がまだ、たかが女1人とあなどっている間に、大幅に跳躍して間合いを詰め、連続して技を繰り出す。数秒とかからない。双方とも一撃のもとにである。

だがそれからが困難だった。残る3人のうち2人が刃物を、最後の1人は禁制の銃をま

で持ち出してしまったのだ。たかが追いはぎには過ぎた武器である。

「チ...」

「大人しくしていればよ。命までは取らねえと言っというてやったのによ」

「テロック、この女を縛りあげてやんな。行きがけの駄賃といこうじゃないか...
良く見りゃァ、結構いい玉だ」

「あいよ。味見はオイラの役だぜ」

緊迫していた空気が下司で野卑な笑いに変わる。

「無礼な。」

眩いて少女は腹立たしげに舌打ちをしたが、未だ余裕を失ったわけではなかった。油断なく敵にスキの出る一瞬を待とうというのだ。

「待ちな。」

“影”が... 他の連中からはそう見えたのだが... 霧と歴史のまとわった壁の内側から、おもむろに姿を現わしたのはこの時だった。

「だ、誰でいおめえは」

黒づくめの長身、漆黒の本物のスペース・スーツに、闇そのもののような深い色あいのマント姿である。こんな場末の、ルールもプライドもへったくれもない三下悪人ばかりの界わいには珍しい。真性の誇り高きアウトロウ（無法者）であろう事は、その無言の威圧力から知れた。

「3対1というのは少しばかり卑怯な気がしないでもないが、な。助太刀させて貰おう」

「な、なんだと。け、怪我をしたくなけりゃ」

チンピラどもは早くも浮き足だつ。その“男”へと、むしろ真っ直ぐに不機嫌な視線を投

げつけたのは少女の方だった。

彼女の身についた礼儀作法というものが、もう少し崩れたものでさえあったならば、余計な事をするなど言いたいところなのである。1人は銃を持っているとは云え、相手はたかが3人。男だとして、こちらがまだ子供こどもした所の残る若い女と見たのでなければ、この界わいで起こることだ。いらぬ口出しなどはしないだろう。...そう考えると、なお一層プライドを傷つけられるのだ。

あからさまにしかめられた眉に男は足を停める。

長い髪の少女は、無言のまま、見事に型を修めた体術で邪魔になる輩を片づけてしまった。男の出現のおかげでそいつらにスキが出来ていた事も確かでは、ある。

が、数動作の蹴りと突き。一瞬、宙に浮いたかと思えた鮮やかな動きは、決して町娘の、必要から生まれた喧嘩拳法のそれではない。

ハウ、と男の鋭い眼の奥で再びかすかな光が躍る。

乱れたマントを片手で押しやり、男に向きなおった細身の少女。

その、開口一番に云った言葉といえば、

「お失せ！」

だった。

いかにも一方的な不機嫌である。

「大層な言われようだな。用は無かったとはいえ、救けてやろうと申し出たのに」

男の口元には状況を楽しんでいる気配が見えた。

「、どうも有難うございました。わたしは他人に借りを作るのは嫌いだ。」

言い切ってしまうと、もう男には構わずチンピラ達の気絶した懐に手を伸ばす。

「...おーおー持ってること...こいつら、本業はスリか。」

「意外だな」

男は平然と歩み寄って来る。

少女は顔をあげて、まだ何か用かという表情を作りながらも、内心では激しく緊張して身構えているのだった。

彼の無防備げに見える立ち姿の内側に、実は1部のスキも許されていない。

この男と争うハメに陥ったら、勝ち目はまずない。

...そんな想いにおののきながら、うっすらと笑った。

「旅銀が足りなかったのですね。自然と身についた。こういう手合いが絶えないおかげで、ながいふなたび（長距離跳躍航行）の途中も飢え死にしないで済んだよ」

「いなか（辺境星域）臭い言い回しだ」

「田園惑星のどこが悪い？」

肩肘張った少女の、抑えてはいるが情熱的な輝き...祖国への誇り。

それを見て、ふっと男は場違いにさえ思える仕草をした。

微笑ったのである。失ったものを懐かしむような、優しい瞳をして。

「アウトロウとは云え宇宙戦士なら地上のはした金なんぞに用はないだろう。わたしには必要なんだ。これは貰っておくよ。.....それじゃ。」

軽く一揖して少女は既にスタスタと立ち去ろうとしている。その高く束ねた黒髪の流れ様を、無表情とも言い切れぬ目で黙って見送る。

パチリと、男の指が低く鳴った。背後の薄闇からにじみ出るように人影。

「つけ（尾行）させろ。1番できる（有能）奴にな。」

「アイ・サー、王。」

数時間後、それでも小娘が追跡者に気づき、宙港近くであっさりまかれてしまったという報告が入った。かしこんでいる影を前にして、キング（王）と呼ばれる彼はなお一層、表に出さない満足を深めたようだと、側近の者たちは皆ひそかに感慨を抱いた。

「... テラザン... か。」

闇の王は低く呟く。

「あの伝説の星の血を強く受け継ぐ者が、まだ、現われえようとはな！」

宙航法なぞは軽く無視して気圏離脱って行こうとしている船籍不明の外宇宙航行船。その、あまりに強引な急加速具合に、若い律気な宙港管制員はアワを喰って上司に呼び出しをかけていた。

「...完全に全ての法規を無視して出て行く気があります！是非、軍の方に連絡して、捕りおさえさせるべきでは！」

「無理だよ。...無駄なことだ。」

年老いた上司は、かすかな戦慄とともにスクリーンを見上げる。

「判らんのかね。あれが《タイアー》だ。星王の船だよ... もう何十年振りになるだろう。このラーヴェ星へ姿を見せたのは.....」

「... “星王” あれが !! 」

真っ暗な底なしの海の中を、船は駆けて行く。

「あ～あ。見ろ、タイスが潰れちゃった★」

潰れたタイスの厚切りにトルティサとチャイとをはさみ込み。

かじりながら、今夜もステラは娼家の裏手の安下宿の1室で、試験勉強...

大銀河が衰退期にさしかかった、その頃のこれは物語である。

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201704131618593298/>

<http://85358.diarynote.jp/201704131618593298/>

2017年4月13日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201704131618593298/>

第一話＊ テラー・メーア...女学院...

第一話＊ テラー・メーア ...女学院...

寮生活、というやつは初めての体験である。自分と同じ年頃の、少女...のみならず教官達に及ぶまで、全て完全な女性体ばかりの中で、暮らすという事態は。

広いホールを満たす地味な濃緑のユニフォーム（制服）の少女達。その中に、自分もまた埋もれるようにして没個性の振りを装いながら、ステラは早くも辟易とし始めている自分に気がついて苦笑を漏らした。

元来が、自分が女に生まれついたのが何かの間違いだったと信じているタチ（性質）である。山のような女の群れの中に身を置いておく、ということに慣れていない。

（しかしさすがに全銀河から集まって来た、選りすぐりの連中ばかりだ）

故郷で見つけていた女達とは何処か、まとうている空気の色が異う。

そう言えば、入学許可試験の場で一人目立っていた、あの少女はどうしているだろう...と、少しばかり伸び上がるようにして彼女は鮮やかな銀の髪を探した。

新入学生ばかりが落ち着かぬ気分で、儀式的開始のときを待っている...それは室内である。

「教官！ 納得のゆかない事があるのですが、質問をさせて頂いてもよろしいでしょうか!!」

誇り高い、そして自負を激しく傷つけられた事実をはっきり主張している声で、その少女はいきなり立ち上がったのだった... 試験開始後3分とたたない頃合いの事である。

「何故このように単純な、初歩の初歩とも呼べぬ出題を、あたくし達は解かねばならないと言われるのでしょうか！ 聖数（いち）と聖数（いち）の和が女性数（に）である事、また、アルファベット（文字の総列）の正確な順位を等と...

このような自明の理とも等しい課題をばかり出すということは、我々受験者に対する侮辱なのですか。或いは... 或いは真実に... 」

それが全銀河最後の女子高等教育機関の、教育水準なのだとしたら困ったものだ、とは自分でも感じていたステラは、内心で肩をすくめながら、その銀色の長い髪の美少女を見つめたものだ。

そのステラの隣りでは、字列を自明のものと云われてすっかり怖じ気づいてしまったらしい貧しげな娘が、それでも真剣な顔をして正確につづろうとやっきになっている。

試験場に居合わせた全ての娘達は...それが貧しい娘の側であれ、銀髪の少女の方に組みたい者であれ... 解答にとりくむ手を休めて騒ぎの中心に見入っていた。

「お答えを！ 教官様！」

小柄な美少女はステラと同じ程も長い輝く髪を振り立て、華奢とさえ見える体中に張りつめたような誇りと、気位の高さを、みなぎらせている。

ほうっと嘆息のような声が室内の何箇所かで漏れた。明らかに、彼女にはどこぞの貴い血筋が流れているように、その者達には見えたのである。

麗々しく自負に満ちた、確かに並の者では持ちえぬ光彩を放つ少女だった。

「テラー・メアは、学生を選びません。」

鋭い真摯な問いに対し、ゆったりと立ち上がった婦人の言った答えはこうだった。

「今の世では虐げられがちな女性の身で、学問をしたいと望み、はるばる当学院まで集まって下さった... それだけで皆さんには、既にして入学の資格があるのです。」

この試験場で皆さんが試されて居るのは現在の学力の有無ではありません。真に知識を身につけたいという意欲があるのかどうか、当学院の校風にそぐうかどうか、を、私共はここに列席して確認しているのみです。

採点の結果は入学後の学習組編成の為の参考資料とされます...

他に、何か御質問は？」

「... いいえ。お騒がせして申しわけ御在ませんでした。副院長様」

ほっそりした美少女は形通り優雅に一礼を尽くすと、静かに腰を降ろして問題に戻った。

それでその折の騒ぎは何事もなくおさまったのだったが...

新入生達の目には、すっかり彼女のあでやかな立ち姿が、印象づけられてしまっていたのである。

「第二話＊星王の船」 (1)

第二話＊ 星王の船

ラーヴェンデラ宙港の狭からぬロビーの片隅。そこだけは少しばかり空いている一画に、別離を前にして寄り添い合う一組の恋人達の姿が見られた。

その相方ともが少女であるからと言って銀河文明の爛熟したこの時代の事であれば驚くにはあたらない。ただ、彼女達が端立って美しく... 自負に満ちて... 明と暗、白銀と宇宙の闇とのような見事なコントラストを持つが故に、周囲を通りすぎる者共の賛嘆の目をそれとはなく集めているに過ぎなかった。

「行ってしまうのね、ステラ。行ってしまうのね！」

「スイリーン。」

黒髪の少女は困ったように相手の、怨嗟さえこもる激しい銀瞳を見つめ返していた。

2人とも、年頃の少女にしては驚くばかりに背が高く、均整が取れている。

「仕方が無いでしょう。15の齢に結婚を嫌って無責任に飛び出して来てしまったわたしだけれど、伯父王、父君共に謀反により既に亡いと聞けば...

唯一の王はわたしだ。行って、星（くに）の乱れを治めてこなければ。」

「それでも。行ってしまうのね。」

「スイリーン！ わたしは帰って来るよ！」 「いいえ！」

ピシャリと銀の髪をなびかせてさえぎった。

「あなたは帰って来ない。2度と戻って来はしない。あたくしを捨て、学院（テラー・メア）を捨て... あたくしとの約束を捨てて。」

「スイリーン！」

「許さない！」

高く音を響かせてステラの頬が鳴った。闇色の髪が乱れる。

「シャイリーン・ライラは裏切者を許しはしないわ。」

知って...いたのでしょうか、ステラ・リー。そうよ...あなたの居ない学院になどあたくし戻らない。例えもしあなたが帰って来たとしても、2度とあたくしを見出せはしないのよ。」

「スイリーン。お願いだから馬鹿な事は...」

「どちらが馬鹿な事なの？ あたくし達にとって、お互いより大切なものが、何があった筈だと言うの？」

「わたしは王なんだよ」

「小っぼけな辺境惑星たったひとつ！」

シャイリーン（魔女）・ライラと自らを呼ぶ、誇り高い星海の民は嘲った。

「約束された小さな権力の為に楽な道を選ぶのね。あたくしとあなたとなら、いつか全宇宙をも掌握できるかも知れないと話した、あの晩の夢は奈辺へ捨てて来たの？」

「スイリーン！ 王位は権力じゃない。何度言ったら解る？！」

初めてステラは声を荒げていた。恋の相手の冷たい銀瞳が細められ、すっと顎を持ち上げる。

「どうせ。」

妖しい炎のように少女は嘲って言い放った。

「あたくしは“何ひとつ持たずに生まれた” シャイレン・シャイリーン（放浪の魔女族）のライラ。おえらい高貴な御生まれの言う真王理念など、言い訳としてしか理解できないわ!!」

再び高く鳴り響いたのはスイリーンと呼ばれる方の頬だった。

「莫迦！」

「…………… さようなら。」

銀瞳を冷たくきらめかせて、薄く笑う少女は鮮やかに歩き去って行く。

「スイリーンっ！」

銀髪はそよとも揺るがない。黒い髪のステラは静かに嘆息をつき…

…かたわらの荷を持った。

「…………… また、会おう。」

そんな2人の別れを、影から見つめる眼があるとも知らず、少女達はそれぞれの未来へ向けて進み始めていた。

まったく同一の道を、反対側へと。

わずか数分後に起こった背後での騒ぎを、ステラは知らない。

(2)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170413/85358_201704132214404529_1.jpg)

跳躍航行も20日目を数え、中距離荷客船の内部はすっかり緊張を欠いていた。無法者共の船の暗躍する宙域には未だ遠く、神経をすり減らす程に他の船が飛び交う混雑からは既に抜け出している。レーダー系の注意がつい散漫になっていたのも無理からぬ事であった。もっとも、彼がいち早く異変に気がついたからと言ってこの船が災難を免れ得たかどうかは定かではない。その為には対象のスピードがあまりにも速すぎたのだから。

ステラは雑居房のごとき3等の片隅で定期航宙船一覽を繰っていた。次のみなと（中継点）からの乗り換えの便を探すためである。今は一刻も早く故郷の星に帰らねばならなかった。彼女を探しあて、最後に反乱の知らせを伝えてくれた老臣は、戦いの傷癒えぬままの無理な長旅で、死んだのだ。彼のためにも急ぎ戻りたかった。

「...小っぼけな辺境惑星たったひとつ...」

投げつけられた言葉をひとり呟いてみる。

だがそれはステラ自身の民の住む星なのだ。

暴政のもとに放置しておける訳がない。

スイリーンにはやはり判らない感情なのかも知れなかった。その辺りが、暗黒の無法世界に名前もなく生まれ育って“ライラ”（切り裂く者）とまで呼ばれ恐れられる様になった野望家の少女と、惑星一つきりの小規模国家とは言え古い古い王家の唯一の姫として育てられたステラとの、決定的な違いなのだろうか。

そんな否定的な考えを抱きながらも尚も美し銀の娘の面影を追う...

ステラ自身が自分の儘ならなさを苦笑した時に、警報ベルは鳴り渡った。

「……………何だ？」

眉をしかめるまでに一呼吸ある。その間にも船体は手ひどい衝撃を受けて人々の体を床に叩きつけていたのだ。

寝台に腰かけていたステラは傷ひとつ無く、そろりと起き上がって静かに身構えた。

「海賊だああっ!!」

窓辺に居た奴達の誰かが叫ぶ。一拍遅れて船内放送が入る。

「チッ！」

舌打ちして周囲の持ち物を手早く荷袋に叩き込んだ。別段、取られて困るようなものは…あっても決して見つからぬよう直接に肌につけているが…こういう場合、若い女であるという一事がどれだけ不利に働くかは先の旅で十二分に見聞きしていた。

前には男児の服装をして顔料で誤魔化せたものだが、今度はそうもゆくまい。既にうろたえ顔で騒いでいる船客達をかきわけて、歩きながら長い黒髪の少女は腰のガンサーベルを抜いた。

「…《タイアー》だーっ！ あれは星王の御座船だぞおっっ」

絶望したような船員の声が響く。

さして抵抗を受ける事もなく艦は獲物に接舷した。乗組員達は皆百戦の強者である。細かい指示を今更必要とする筈もなく、各々好みの場所へといち早く散って行った。

「御出になるのですか、“王”よ。このような小さな船に？」

立ち上がろうとする長身の闇色の姿に、声をかける者がある。

「ゾイドか。ふふ、気が向いた」

「御供仕ります。」

2つの影が音もなく、やがて混乱を来し始めた船内に歩み出て行くと、強者たちは皆喜び勇んで剣札を捧げ、左右に道をあける。そしてあわれな獲物たちはその姿に触れただけでなお一層ふるえ、絶望と悲嘆の声をあげる。

すでに、船内はあらかた静まりかえり、乗客達はみな殺されるか、拉致されるか、恐怖のままに茫然と力なく坐りこんでいるかしていた。

あてもなく星王がひきかえしかけて角を曲がった時である。行手より激しい剣の響きと、きれぎれの少女の高い声の気合いとが伝わって来た。

「さあ！ とっとと大人しく御座船とやらへ帰るがいい。わたしに関渉するな！」

群れている男どもは5～6人。壁を背にとって、狭い廊下という条件を有利に。それにしても星王直属の配下たちを1人であしらうなど、並の腕、並の人間であろうはずもない。

紅潮させた頬の生きた象牙のような美しさといい。その気迫と気品がかえって女を見慣れた海賊達の関心をひいているのだ、とまでは、自分の外見にかまいつけたことのない処女戦士（アマゾネス）に理解できようはずもなかった。

「こいつァ、上玉だ。」

「身代金がいいか、それとも基地（みなと）へ連れて帰るか」

気圧されながらも、男たちは優れた女戦士への賛嘆をかくそうともせず、むろん決してあきらめようはずもない。

更にひときわ背の高い戦士たちが2人、影のように廊下の向うから立ち現れたのを知ると、ステラは覚悟を決めた。

ガンサーベルの切っ先をゆうりと持たげ、己れ自身に向ける。

「わたしに手をかけてごらん。わたしは、泣いて屈辱に甘んじられるほど、か弱くできてはいない。」

本当のことであった。真剣に、いつであろうと誇りを捨てるよりは潔い死を選ぶだけの強い感情が、彼女にはあった。けれどその折も折、あとから現われた闇色の戦士が、おだやかに声をかけたのである。

「どうかな。本当に、果たしておまえは自決できるものかな。」

「なに?!」

この上もない侮辱に、少女の全身をつつんで鮮やかな怒りの炎が燃え上がる。

声はなおも続いた。

「おまえは死ねはせぬ。このような、旅の途上の、荷物船の中などではな。何故ならおまえには重大なる義務が、還らねばならぬ故郷、成し遂げねばならぬ物事が...

あるのだからな。」

「おまえは... !!」

叫びかけ、少女は口をつぐんだ。

襲撃してきた艦が御座船《タイアー》である以上、その闇色の衣に包まれた長身の戦士は、他ならぬ星王自身でなければならない。

そして少女の優れた眼は、否応もなく数年前、惑星ラーヴェでのその男との偶然の出会いを、思い起こさせていた。

非情な声はなをも続けられる。

「おまえの言う“夢”とやらはどうした...? それは安っぽい激情にかられて、その場で断ってしまえる程度のものであったのか?」

「否。」

かなわない。

そう少女は驚くほど冷静に自覚していた。

この男ならば、つい己が喉元につきつけた刃を使う暇すら与えず、手からサーベルをもち離してしまう事も可能だろう。

そしてもともと、死んでしまう気などないのだ。

「はったりは、よすがいいな。」

少女はキラキラと光を放つ黒瞳で真っ直ぐに星王その人の顔を見上げたまま、無言で剣をおさめた。

敗けたのだ、完全に。

「...来るがいい。ゾイド、行くぞ。」

「は。」

間もなく御座船《タイアー》は、小さ過ぎた獲物である荷客船になどもうなんの注意も与えることはなく、暗黒の宇宙を再び動きはじめていた。

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170413/85358_201704132214404529_2.jpg)

湯あみさせられ、衣服を、髪を整えられ、不審を抱きながらも機会を待って諾々と指図に従っていたステラが一室に導かれたのは、夜半すぎの事であった。

(未完)

(草稿&没原稿)

(草稿&没原稿)

(草稿&没原稿)

(sect.1) (高校?)

sect.1 「3対1はちょっと卑怯なんじゃないか？ 助太刀させてもおう。」

人気のない路地裏でその男が塀のかげから声をかけてきた時に、“1”の方のステラが安堵と正義の味方の登場に対する喜びと、に満たされたかと思ったら大マチガイである。あからさまにしかめた眉で余計なお世話とばかりに睨みつけた。

彼女に云わせれば街のチンピラのたかが3人が相手。男だってこちらがまだ子供こどもした所の残る若い女だと見たのでなければ、いらぬ口出しなどはしなかつたらう。

そう考えればなおいっそう誇りを傷つけられたので、彼女は、無言のまま、見事に型を修めた体術であっさりチンピラ達をのしてしまった。背丈さえ半分に及ばないような小娘が長いマントを翻して3人突き斃すのに4秒とはかからない。

相手が油断し切っていたという利点はあるにせよ、一瞬宙に浮いたかとさえ見えた素早い適確な動きは、それが少女の細い体躯の上にあられただけに何か奇跡めいた一幕の印象を与えた。

ホウ、と男の鋭い眼の奥でかすかな光が躍る。

わずかに乱れたマントの肩のあたりを片手で後ろに押しやり、男にむきなおったステラが開口一番云ったことはといえば、

「お失せ!!」

だった。

いかにも1方的な不機嫌である。

「大層な言われようだな。用は無かったとはいえ助けてやろうと申し出たのに。」

男の口元に状況を楽しむ気配が見えた。

「、どうも有難う御在ました、わたしは他人に借りを作るのは嫌いだ。」

ステラはもう男に構わずチンピラ達の懐に手を伸す。

「おーおー、持ってること。ん、これはこいつらの財布じゃあないな。してみると本業はスリか。」

「意外だな。」

男は平然と歩み寄って来る。

ステラは顔を上げてまだ何か用かという風に表情を作りながらも、彼の無防備げに見える動作の内側に実は1分のスキも許されてはいないのを突嗟に見てとって、かすかに身構えた。

「旅銀が足りないのですね。こういう手合いが断えないおかげで長距離跳躍航行（ながいふなたび）の途中でも餓（かつ）え死にしないで済んでる...

どこかこの近くにパトロールの詰所は？」

「辺境惑星（いなか）臭い言い回しだ。」

「...田園惑星のどこが悪い？」

肩肘はった小娘の抑えてはいるが情熱的な輝きを見て、ふっと男は場違いにさえ思える仕草をした。微笑ったのである。

失ったものを懐かしむような優しい瞳をして。

「Pなら表通りへ出て右手3ブロック（区画）先だ。どうするつもりだ？」

「ありがとう。これを届けるんだ。中味はもう抜き取られてしまった後だけれど入れ物だけでも手元に戻ると喜ぶ人もいるからね... 思い出の品であったりなどもして。」

軽く一揖してステラはすでにスタスタと歩き去ろうとしている。

その後頭部で束ねた長い黒髪の流れ様を無表情とも言い切れぬ目で黙って見送りながら男が指を鳴らすと、背後の薄闇からにじみ出るように人影。

「尾行（つけ）させろ。1番有能な（できる）奴にな。」

「アイ・サー。王。」

数時間後、それでも小娘が追跡者に気づき、宙港近くであっさりまかれてしまったという報告が入ると、『王』（キング）と呼ばれた彼はなお一層、表面に出さない満足を深めたようだと側近の者たちはみな思った。

「... テラズ.....か。」

彼は低く呟く。

「あの伝説の星の血を強く受け継ぐ者がまだ現れようとはな!!」

「Four Loves. 1. 金と銀。」

Four Loves. 1. 金と銀。

入寮当初からよく目立つ2人だった。3つの寮同士の秘かな拮抗意識の盛んなこの学校では、2人は“次期”としてそれぞれの寮長から可愛がられ、たちまち頭角をあらわした。容姿・才覚ともにズバ抜けていたのである。

一方の名をステラ・リー＝ジョゼフィーヌ。もう一方をスィリーン・ライラ。
黒髪をいつもきっちり束ねているのがステラで、流れる銀色のスィリーンである。

この2人、入学試験の日に早々とひと騒動をおこしていた以外、何の面識もなかったが、次期寮長として互いに反目しあい、ことあるごとに競合するにつけ、自分と違う、むしろ正反対の特性を持ちながら力はまったく互角である、という相手に、魅きつけられるものを感じはじめたのはむしろ当然といえよう。

最初から、それはよく目立つ少女たちだった。

“銀河の星の海” 「ふたり・Part I」 (恒沙真谷人)

※ダイジェスト版です。
漢文読むつもりで、自分で脚色して下さい。

“銀河の星の海”

ふたり・Part I

恒沙真谷人

入寮当初からよく目立つ2人だった。3つの寮舎同士の秘かな拮抗意識の盛んなこの学校（ソロン）では、2人は“次期”としてそれぞれの寮長から可愛がられ、たちまちのうちに頭角をあらわした。容姿・才覚ともにズバ抜けていたのである。

一方の少女の名をステラ・リー＝ジョゼフィーヌ、リステラス星系人。
他方をスイリィン、もしくはシャイリーン・ライラといった。

黒髪をいつも邪魔くさそうに結び上げているのがステラで、流れる銀の色をいつも誇りにしているのがシャイリーンである。

この2人、入学試験の日に早々とひと騒動を起こしていた以外には何の面識もなかったが、銘々の次期寮長として互いに反目しあい、事あるごとに競合するにつれ、自分と違う、むしろ正反対の特性を持ちながら力量はまったく互角である、という相手に、瞠目させられるべきものを見出していったのはむしろ当然と言えよう。

最初から、それはよく目立つ少女たちだった。

0

火災が起こったのはまだ入寮後、半学期つまり80日もたつたないかの頃だった。

「こっちだ！ みんな！ 誘導するからついて来て！」

「落ちつきください先輩（おねえさま）がた。火はこちらの棟までは移って来ませんわ。」

都（みやこ）のほぼ半分をなめつくした大火に、不運にも全焼してしまったステラの寮棟と、風向きから奇跡的に免れたシャイリーンの寮。

残る1つはなんとか半焼程度で済んだようだった。

しかし。

この学校（ソロン）の生徒たちはみな遠方からの留学生である。それも王侯貴族の息女たちが金にあかせてというのではない。誰もがさして裕福でありもしない平民の...場合によっては貧民階級の出さえ。

ただただ中央に出て学問を身につけたく、やっとの思いでここ、この時代には珍しく少女のみを集め、それも花嫁修業をではなく、堅実な指導陣のもとで男性と同じ高度な教育内容を与えてくれる、おそらく銀河唯一の学術府（ソロン）...を、探しあてて、1年も2年もかけて星の海をおし渡って来た娘たちばかりなのだ。

1時閉校して寮舎・講義棟の復旧を待つ、などということは、休暇あけには即ち、学友の半数以上は校舎に戻って来られない状態になっている事を意味した。

みな、熱意以外は帰りの旅費のアテすら定かでないままに、恒星間荷客船に飛び乗って来たのだから。

学校側の努力の末、授業はある篤志家の助力のもとに続行されることになった。

しかしそこに些細な問題がひとつ。

○

「イヤです。なんだってあたしたちが自分の部屋を立ち退かなけりゃならないんです？」

馬鹿げた話だが、聡明な、と云ってもそこは感情豊かな年頃の少女たちである。半焼の第2寮生たちは銘々の個室を臨時に焼け出された組の寮友と共用することに否やはなかったのだが。

日頃から殊に対抗意識の強い第1棟と第3棟の間で、ほんのわずかな発言から感情がこじれてしまった。

第1寮棟はもともとが2人部屋だ。第3棟の個室にとりあえず定員を増やしてやっかいになろうという時、特に仲の良いルームメイト同士が、あたしたちは絶対に離れたくないと云いだし。自室からの追い出しをくらいかけた第3寮生の抗議から、コトは始まってしまったのだった。

他の第1寮生にしてみればもとより焼け出されて神経質になっていたところでもあり。日頃の反目相手の世話になろうというのもプライドに障る。それでも理性で寮友（なかま）の非を認めて一旦は謝罪を入れたのだが、いかんせん、先に気を悪くしていた第3寮生の“生意気よ”の声がしつこすぎた。売り言葉に買い言葉で相方ともに完全にヘソを曲げた。

そして両棟の全員を集めての対策会議…。

○

((どこまで行っても平行線だ。))

ステラはいい加減イライラしていた。かれこれ話し合いが始まってから3～4時間も経過している。

その間、会議が停滞していたわけではない。第3棟の現状に第1寮生が1人ずつ厄介になるのが正しいか、第3寮生が移動して棟の半分をあげわたすべきなのか、むしろ様々な角度から検討が加えられ、熱心な議論が続いている。

だがしかし、結局は、

((感情論))

なのである。

どちらも自分たちがどう悪いか、相手が何にヘソを曲げているのか、よく解ってはいるのだ。

解っていて、それでも自分から最初の1歩を引くことができないのが、そこは意地というものだ。

((変わらないな。女のコって生物は。故郷でもよく下らないことで意地をはりあったっけ。))

半ば傍観者的な感慨を抱きながらも、自分自身、議論する、その事自体が好きで活発に参加してはいた。

それに...ステラは元来、“仲間”という観念への意識の強い、縁者に対していたって面倒見のよい少女である。例えば非が完全に自分たちにあると解っていた場合でも、争議のもとになった友人たちを責めさせたくない一心で、同じ事をしただろう。

そういう性格の故に、シャイリーンが次の発言をした時、ステラは本当にその真意を計り兼ねてとまどわされたのだった。

「結論の出るわけもない討議をいつまでも続けたところで時間の浪費ですわ。初めに必要以上に相手を責め過ぎた第1棟の方に非があるのですから、折れるべきだとあたくし思います。」

平行線...そろそろ皆の発言も途断えがちになったところに、広い室内の隅々までとても良く通る銀のイメージの声でそれは言われたのである。

誰もが意地の張り合いの馬鹿さ加減を肌身と空腹にしみて感じはじめ、かといって今更あやまるにあやまれずに進退きわまっていた矢先だった。

シャイリーン。

彼女の流れる銀色の髪と殆ど華奢ともいうべき繊細なうなじ。

白い細い形の良い指先や、ほんのり桜貝色のツメの描き出す曲線。

限りなく精緻な面ざし。

それらを、そしてともすれば弱々しいものとしての印象を与えがちなそれらを統べて何よりもよく彼女を表現している濃藍色（ブルー・ブラック）の、常に自らを何ものかに向かって駈りたてているような瞳を、通りいっぺんの観察ではなしに妙に鮮明にステラが見識したのは、おそらくこの瞬間が初めてだったろう。

もっとも、それは程度の差こそあれ、その場にいる皆が感じていたことなのである。シャイリーンは、この日、それまで1度も挙手して発言を求めるという行為をしていなかったのだから。

「...いや...そう云われると...」

最初の一驚が通り過ぎると、ステラが一瞬危惧してしまったのとは裏腹に場の雰囲気はリラックスできるものになった。第3寮長が困ったように笑い、それから素直に第1寮長へ微笑しかける。

譲歩しあいの変った場になった親しい相談事の中で、今度は黙りこむのはステラの番だった。

この人...なぜこういう事ができるのだろう。

軽い衝撃。

驚嘆、といってもそれはよかった。純粹な讚美というべきだった。

結局、ほぼ全面的に第3棟の側が妥協し。

○

「すてきだ。あなたと同じ部屋だなんて。」

渡されたルームナンバーに荷物を運びこんで来て、扉を開けるなりステラは云った。

「あら、何故？」

長い髪を揺らして窓際で振り向いた立ち姿は... シャイリーン。

ステラはちょっとした幸運（ラッキー）に漆黒の瞳を心持ち見開いていた。

「何故？ あなたと同室になったって云ってそう思わない人っているのかな？」

「そういうものかしら。」

「そうだよ。おたくって意外と、自覚してないんだね。」

そんな会話を交わしながら部屋の使用法を相談して決めて。

「寝イスを使う？ それともあたしと一緒にベッドで寝る方がお好み？」

「ん〜。当分はソファにしとくよ。わたし、実はものすごく寝ぞうが悪くてね。迷惑かけちゃう。」

一見天真爛漫に思えるステラは果たしてシャイリーンのやんわりした質問の真意に気が

ついたのかどうか。

「前はサ、人数が半バだったもんで、新入生ながら寮長と同室だったんだけど、よくベッドからコケ落ちてね～～。もう面白がって吹聴されて冗談のタネにされて、えらい目にあった。」

クス。とシャイリーンは微笑む。

この人、いつもより興奮してるみたいだわ。

「あのね。」

ステラは急に真顔になって振りかえった。

「尋きたい事があるんだけど、いい？」

「え？」

「なんでさっき、ああいう風に話せたわけ」

シャイリーンはしばらく黙ってお茶の仕度をしていた。

ステラも別に沈黙の重さを苦にする風でなく、1人で荷物の整理にかかっていた。

「...ああ云えば... と、この結果を期待していたからよ。」

その態度が妙に心になじんだので答える事にする。

(おわ～～初期設定と違ってしまったっ)

(未完)

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201704142137067129>

<http://85358.diarynote.jp/201704142137067129/>

2017 年 4 月 14 日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201704142137067129/>

(遠い世界になにを探して)

遠い世界になにを探して
いくというの
遠い世界になにか
あるというの

むかしわたしたちは青い
水の星に住んでいたんだよ

むかし
わたしたちは青い
水の星に住んでいたんだよ

(彼女はスタークイーンにまつわる記憶の全てを解きはなした。)

セキュリティ上、画像はサーバーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170412/85358_201704122029343836_1.jpg)

「そう... たしかにわたしは、今はスタークイーンではない。

けれど、

おまえはスタークイーンたる名をつぐにふさわしくない。

去りなさい。

おまえではない。」

彼女はスタークイーンにまつわる記憶の全てを解きはなした。

(…黄金と群青の海…)

むかし 冒険者たちは

金と青の 海を旅した

いま 開拓 独立者たちは

銀と漆黒の海を

征服しようとしている

(…黄金と群青の海…)

“船を出せ” その熱意は

とどまることを知らず

“かいをとれ” その意気は

奈落をこえても 続く。

…おお…

世紀の大芝居、うたげの狂騒よ。

(たぶん派遣時代)

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201704122055345269/>

<http://85358.diarynote.jp/201704122055345269/>

2017年4月12日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

(まんがのネーム!) W (^ W ^ ;) W (中学1年!)
(^◇^ ;)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません(http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170412/85358_201704122059357772_1.jpg)

侍女「あら! お眠りですか? スター・クイーン」

女王「起きてるよ」「プライベートタイムには愛称で呼ぶよう、いつも言ってるでしょう?」

侍女「すみませんステラ」「何をお考えでしたの?」

女王「ちょっとエモノの事などをね...」「なにしろここ半年、

大きなふね(宇宙船)は通らなかったからね...」

侍女「そうですね。乗り組み員たちも、だらけだしてますね」

女王「このままでは宇宙海賊スター・クイーンの名が泣くというもの...」

女王「何か大きなエモノはないもんかなァ...」

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません(http://diarynote.jp/data/blogs/1/20170412/85358_201704122059357772_1.jpg)

船員「わ〜〜〜っ どろぼーだー〜〜ッ!!」

女王「なにごとだ、さわがしい!?!」

部下「ボス(首領)!! 食糧貯蔵庫に密航者がいます!」

女王「よし!! すぐに行く」

女王「くそ！ いったいどこのどいつだ！？」

私の船と知っててもぐりこんだのだったら、

ただではおかん!!」

(未完)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません(<http://diarynote.jp/data/blogs/1/20170412/85>)

(キャラ設定)

(キャラ設定)

(キャラ設定)

(星王とステラ)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170413/85358_201704131806578302_1.jpg)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170413/85358_201704131806578302_2.jpg)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170413/85358_201704131806578302_3.jpg)

(ステラ) (少女時代)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません(http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170412/85358_201704122152427330_2.jpg)

(ステラ姫 12歳)

結婚ですって!?

おぞましい!!

私はやっと数えて15に

なったばかり。

外の世界ならば

これから夢を実現させて

ゆく年だのに。

(たぶん中2の) 12 / 25

「王女殿下」正装のステラ。

セキュリティ上、画像はサーバーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170421/85358_201704212059288120_1.jpg)

“星出”当時のステラ・ラ・ヴィスタリア。

“星出”当時のステラ・ラ・ヴィスタリア。

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません(<http://diarynote.jp/data/blogs/1/20170412/85>)

髪＝漆黒

瞳＝濃緑

肌＝日焼けした白

最果ての貧乏惑星“地球”女王国の、最後の少女王。

重臣たちに政略婚を押し付けられそうになって、

バカバカしくて出奔した...

矢先に、

乗っていた船が宇宙海賊につかまり、

最後まで果敢に抵抗していたせいで

船長（のちの星海王）に気に入られ、

手ごめ（？）にさえてしまって...

ぐれていた頃。

海賊稼業の後継者として育てられるが、

一旦脱走してカタギになる。

のち、うようよ曲折して自分の処女をうばった男を殺し、

初の星海女王となった。

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません(<http://diarynote.jp/data/blogs/1/20170412/85>)

(この時代の「星海王」のキャラデザは

(明) ちゃんに進呈しよう♪彡)

※長身。

髪は短め。

茶髪茶眼。

日焼けした白人種。

けっこう本気でステラに惚れていた☆

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201704121954277769/>

<http://85358.diarynote.jp/201704121954277769/>

2017年4月12日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

(学生時代のステラ)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170413/85358_201704131618593298_1.jpg)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170413/85358_201704131618593298_3.jpg)

ステラの入学式？ と、てごめられシーン★ (中1～2)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170421/85358_201704212023438785_2.jpg)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170421/85358_201704212023438785_3.jpg)

(ステラ) (成人)

セキュリティ上、画像はサーバーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170412/85358_201704122055345269_2.jpg)

(スタークイーン)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170412/85358_201704122055345269_1.jpg)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170412/85358_201704122029343836_2.jpg)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170412/85358_201704122029343836_3.jpg)

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201704122029343836/>

<http://85358.diarynote.jp/201704122029343836/>

2017年4月12日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

(学生時代のスイリン)

セキュリティ上、画像はサーバーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170413/85358_201704131618593298_2.jpg)

スィリーン (シンシア) (学生時代)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170412/85358_201704122152427330_3.jpg)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170412/85358_201704122152427330_1.jpg)

「銀の恐怖」 シャイリーン・ライラ。

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170414/85358_201704142137067129_1.jpg)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170414/85358_201704142137067129_2.jpg)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170414/85358_201704142137067129_3.jpg)

“銀の恐怖” スィリーン。

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170412/85358_201704121954277769_3.jpg)

“銀の恐怖” スィリーン。2代目の星海女王。

ステラのライバルを自認しているが、

あまり相手にしてもらっていない☆
女学校時代の親友（ゆりっつ）。

薄幸な敵キャラ★

※この時代のマントは耐熱防寒耐真空。
防弾や反撃も可能な実用品であり、武具である。
⇒マントつけてるのはヤクザの証拠！

スィリーン。

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170309/85358_201703092228514514_3.jpg)

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201703092228514514/>

<http://85358.diarynote.jp/201703092228514514/>

2017年3月9日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

☆ 銀髪3人娘 ☆

(画像3) ☆ 銀髪3人娘 ☆

セキュリティ上、画像はサーバーに登録してあるものしか使えません(<http://diarynote.jp/data/blogs/1/20170309/85358>)

(左) サキ・ランの転生体“ラングウッド”(蘭花女神)

(中) “永遠の放浪者”リュシェイア・マリス(銀狼)

(右) “銀の髪のスィリーン”(星海女王)

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201703092010594928/>

<http://85358.diarynote.jp/201703092010594928/>

2017年3月9日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

(スィリーンとリュシェイア) (見分け不可★)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170413/85358_201704131906452165_1.jpg)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170413/85358_201704131906452165_2.jpg)

(たぶん晩年？ のスイリーン。)

セキュリティ上、画像はサーバーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20170421/85358_201704212138029705_3.jpg)

(設定資料)

(設定資料)

(設定資料)

『銀河の星の海 ～星海女王伝～ 』

<http://76519.diarynote.jp/200605270027420000/>

2006 年 5 月 27 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=243 <http://76519.diarynote.jp/200605270027420000/>

そして、長い永い、「銅の時代」に入ります.....。

「惑星の私有許可」はやがて「一恒星系内の全惑星を獲得した者は、当該恒星系自体を占有する旨を認可」という段階に進み、それぞれ価値観の異なる企業や個人や団体によって割拠される星系群は、どんどん拡大して行き.....。

やがて、星間運輸網まですっかり中央政権の手を離れての「分割民営化」が始まり、どんどん進行して、採算割れの定期航路は、次々と削減されて.....。(※)

数世代、数千年を経るうちには、すっかり「中央って何？」という状態の、退化が進んだ地方分権(?)の時代となってしまいました.....。

その過程で、官営航路の廃止に伴って、高価でかつ危険が伴う個人運輸業者が輩出されるわけです。大手企業は当然のようにリスクが低くて旨みの大きい航路を独占してしまうので、中小零細個人業者は、危険な宙域を法外な料金で飛んだり、大手専用のはずの航路をかすめて非合法品を運んだり、さらにそれを横から狙って強奪して闇商人のルートに売りさばいたり.....、したりしちゃうわけですね。

そんな彼らの間で、
「星海王」と呼ばれ、(※)
「宇宙最強」とされ、
「カッコイイ個人」

である頭領の存在が、

.....ありましたとさ.....。d(^_-)

という列伝の中から、
特に人気の高い話の、

《二人の星海女王時代》

.....これは是非、「訳出」したいなあ、と.....♪

♪。(˘)。♪

(参照したければ資料)

<http://76519.diarynote.jp/200605270027420000/>

<http://76519.diarynote.jp/200605270027420000/>

2006年5月27日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=243 <http://76519.diarynote.jp/200605270027420000/>

挟撃の間隙。(宇宙史逆走) 2015年9月19日

<http://85358.diarynote.jp/201509191505334874/>

2015年9月19日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201509191505334874/>

《リ・ズ体制》末期。

自治や独立を求めて一斉に、あるいは偶発的に時期を同じくして蜂起した各惑星や恒星系の自由市民らの動きを封殺するべく、中央政府は急ぎ軍警を増員し派遣したが、当然ながらその指揮網は煩雑かつ不明瞭なものとなり、補給線は限界まで延びきって惰弱の極みと化した。

ほどなくして《リ・ズ》軍の兵站基地や輸送船団のみを狙う私掠武装船勢力が各地で自然発生した。

奪った食料は貧民は下層民たちに廉価で、武器弾薬の類は各地の反政府勢力に適正価格で、頒布したことから義賊と呼ばれるに至る勢力が発生し、飛び火し、各地上での経済市場の混乱による自治権確立闘争の膠着化を一気に解消に導いた。

《リ・ズ》もただ手をこまねいていたわけではなく、防御の難しい補給線を攻撃者に対してさらすことをさけ、最新鋭の亜空間技術を使って他次元経由の直結経路網を突貫工事で張り巡らせ、恒星間空間を密閉船で物資や人材を運ぶ...という運搬手段自体を時代遅れのものとした。

同時に《リ・ズ》による公的商船団航路の警護整備体制も廃止され、一般の商用娯楽移動も《リ・ズ》の経路を使用が許可されなければ他惑星との安全簡易な往来が不可能となっていた。

自由商人たちは自ら安全を確保して果敢に星間移動の自由を確保しようと試みましたが、ここで問題になったのが、かつては【義賊】と讃えられた、軍の補給線攻略を生活の糧と

していた武装船団の不法者たちである。彼らは軍の兵站という餌を失い、次には富裕層の娯楽客船を狙うという手段に出たが、これも危険を嫌った選民たちが外遊自体をやめるに至り困窮し、次の獲物として自由商人たちの貿易船団を（なかば面白半分に）襲うようになっていった。

宇宙自由貿易を護るために不法者たちに苛烈な闘いを挑み支配したのが《星海女王》と恐れられた《銀のスイリン》であり、その行き過ぎた粛清に対抗する勢力をまとめ、結果として自由商人護衛業船団を立ち上げたのが、《漆黒の》である。

<https://www.youtube.com/watch?v=ge4K1TyKeoU>

海上自衛隊東京音楽隊 Tokyo Band 海の男達の歌

http://diarynote.jp/home/diary/edit/?time_id=201509191505334874

コメント

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2015年9月20日 8:41

あれ? (^ ^ ;) 「自分の」 ナマエを忘れた... www

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2015年9月20日 15:15

ところでこの回、ものすごく健気で愛らしい、いわゆる「美少女キャラ」が出てくるのですが、

...まさか、狼さんじゃ...

...f^*^;...

...えええ...ッ! (￣〇￣;)!

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2015年9月23日 0:15

古資料発掘。(°;)

銀のスイリーン・ライラと、

漆黒の

ステラ・リー・ジョゼフィーヌ

だった...(*;)...

...没!

惑星《緑》が、後の《漆黒の星海女王》の出身地。(?)

コメント

<http://85358.diarynote.jp/>

<http://85358.diarynote.jp/>

2015年9月23日 0:07

惑星《緑》が、後の《漆黒の星海女王》の出身地なのは確かで...

「独立闘争時の戦災の焼け跡から踏みとどまって、緑化復古に成功した星」。

つまりイコール、惑星《白き沙》の改名後だった。ってこと...??

(新資料) (講談社X文庫のための? 梗概)

<http://85358.diarynote.jp/201704142315303280/>

2017年4月14日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

銀河末期。

1. 星海王は代々男で、
「先代を倒した男が跡を継ぐ」システムで、数百年? 続いていた。
2. ステラ(仮名)は辺境惑星の唯一の王位継承権者で、
伯父王と父王が相次いでテロ死の後、
「でも女だから」「王位なんて任せられないし!」ということで、
王家に連なる重臣(実はテロ犯)の総領息子を、
ムリヤリ「入り婿」にとらされそうになる。
3. 総領息子の親戚で、ステラの幼馴染? で
王位継承権からは遠い男子が、「星出」をけしかける。
4. ステラ、侍女を置いて星出する。(侍女の名前の資料どこだっ?)
5. 入学前に星海王にメをつけられる。
6. 寮で同室になったえろえろスイリンとゆりる。(^^;)

(あれ? (^^;) 脳内に、

「ぶじ卒業した」バージョンと、

「途中で休学したままフェイドアウトした」バージョンの、

別時空があるわ...w

(この項、いずれまた！)

6. まあとにかく星海王にてごめにされた後、反撃してぶちのめす。
7. ステラ、星海女王に就任。
8. ある時、銀河半周して追いかけて来た侍女と合流後、うふふな仲になる。
9. 嫉妬に狂った《銀の恐怖》と大戦争になる。(--；)
10. スタークラウンをスイリンに放擲して、女王と侍女はカケオチする。

めでたし、めでたし。

...みたいな、話...??

w (^ ^ ;) w

(借景資料集)

(借景資料集)

(借景資料集)

(借景 BGM 集)

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201703102004202652/>

<http://85358.diarynote.jp/201703102004202652/>

2017年3月10日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=222

エルとエイリスのいつもの痴話？ 喧嘩w

<http://85358.diarynote.jp/201510090928078366/>

2015 年 10 月 9 日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18 <http://85358.diarynote.jp/201510090928078366/>

セキュリティ上、画像はサーバーに登録してあるものしか使えません (http://diarynote.jp/-data/blogs/1/20151009/85358_201510090928078366_1.jpg)

(昨夜送信したのが載らなかったみたいなので再度～☆)

ってか、まんま「杉谷好一と磯原清」...w (^ □ ^ ;) w...

「破壊を恐れてどうする！ 逆に早く破局を見せてやるのだ。
そこからでなければ秩序の構築はありえない。」

「あなたは人間のひとつの側面を語っているに過ぎない。
破局を見ずとも、平和を志向し秩序を育てている人間もいる。」

人にはもっと多様な部分が隠されているのです。

誰も、あなたの理想のための道具ではない！」

(出典次項>)

<http://85358.diarynote.jp/201510091015071277/>

2015 年 10 月 9 日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=225 <http://85358.diarynote.jp/201510091015071277/>

<http://diarynote.jp/items/books-jp/4091720021/>

前項これね。(^ w ^) g

処女戦士ジレル 暗黒神のくちづけ (ハヤカワ文庫SF) C・L・ムーア

<http://85358.diarynote.jp/201704150658538490/>

2017年4月15日 http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18

<http://diarynote.jp/items/books-jp/4150100365/>

(承前コメント欄) (^ ^ ;)

これですね... ♪

そもその「元ネタ」は、もちろんコレでしたとも... ! ♪

それとももちろんコレと ♪

↓

http://bookshelf.co.jp/product_info.php/products_id/60951
処女戦士ジレル 暗黒神のくちづけ (ハヤカワ文庫SF) C・L・ムーア

中学時代の私のもっばらコレで育ったはず? なんですが...

↓

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ハヤカワ文庫>
ハヤカワ文庫

その後、このあたりによろけました... www

↓

<https://ja.wikipedia.org/wiki/講談社X文庫ホワイトハート>
講談社 X 文庫ホワイトハート

さて。今日は罵異層に逝ってきます... ★

奥付

奥付

リステラス星圏史略

古資料ファイル

8 - 6

『星海女王伝』

～銀河の星の海～

../../book/112899

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：../../users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ

../../book/112899

電子書籍プラットフォーム：パプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

リステラス星圏史略 古資料ファイル 8-6 『星海女王伝』

著 霧樹 里守 (きりぎ・りす)

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
